三浦綾子の言葉（３）

残像(1972 年)

金がすべての兄栄介、彼との交際の末、妊娠させられたあげく自殺した紀美子。栄介の妹、弘子は心を痛める。そして家族が崩壊している。《家族とは、兄弟とは》

「何が起こるかということに重点を置くのではなくて、何が起きようと、とにかく、いかに生きるかという、生きる姿勢に重点を置くべきだ。」

「金が何よりも大事な人間って嫌いだわ、冷酷で。」

「無視するというのは、ひどく傷つけることなのよ。」

「信じるということはね、相手が見えないから信ずるんだよ。わからないから信ずるんだよ。結婚だって、本当のところはわからないが、信じ得る人間だというほうに賭けて、結婚する。」

「人間が一人を楽しむ時間にも、限りがある。」

「人間には男性と女性がいるのではなく、男類と女類がある。男類と女類はまったく別の生きもの。」

「人間というのは、時がたって、怒りがとけたり、憎しみがうすらいだりという、そんな解決のしようしかない、お粗末な存在なんですよ。愛によって許すとか、寛容の故に許すという高尚なことはちょっと無理なんです。」

「兄弟は同じ親から生まれた別々の人格さ。同じ親から生まれた他人だ。」

「人間って、同じ屋根の下に住んで育ったからといって、心と心が結びつくとは限らない。空間的な距離の近さは、内面的な心の近さとは関わらない。」

「人間って、みんな復讐したいものを持って生きてるんじゃないの。あいつに天罰でもあたらないかなどど、はかない望みを持ったりして。そんなものなのよ、人生って。」

「結婚なんて、おめでたいとかおめでたくないとか、死ぬまでわからないことですからね。あまりうきうきすることもないんですよ。不幸に育った人は、親の結婚がどんなものか、知っていますよ。だから口の先だけでおめでとうなんて、いいやしませんよ。」

「罰があたらないで、人間したいまま悪いことをしている状態が、最も恐ろしい罰だろうね。」

自我の構図(1972 年)

国語教師慎一郎と美術教師壮吉、二人は共に絵画を得意とし、慎一郎の妻美枝子を画題に選ぶ。皮肉にも慎一郎の絵が日展に入選する。壮吉の自殺をめぐって、慎一郎は疑われる。そして美枝子への思いと妻への思いと心は揺れる。

「人間、普段の生き方というのも大事なものですね。」

「人間は上手がわからないという弱点がある。上の者は、下の者の力がよくわかるが、下の者は、自分より上の者の力がわからない。」

「結婚はね。これは契約だ。約束だ。男と女が、一つの家庭を築いて行こうという、いわば一生をかけての約束の仕事だ。」

細川ガラシャ夫人（1973 年）

秀光の娘で細川忠興に嫁いだ玉子の波乱万丈の 38 年の生涯。

「人生で待っているのは、老いることであり、病むことであり、愛する者との別離や、裏切りに

よる苦しみであり、そして最後の死である。」
「生まれた者は死ぬ。若い者は老いる。健やかなる者も病む。美しい花も散る。」
「謙遜ほど人間を美しくするものはない。」
「人間を見る時は、その心を見るのだ。人間の価は心にある。」

毒麦の季(1971 年)
夫の浮気で離婚に踏み切った妻、父と愛人のもとに残された息子は追い詰められ、ある事故を引き起こす。

逃亡(1972 年)
旅先で出会った一人の男の思い出話。いかにしてタコ部屋から逃げたか。
「人間は、少しでも他より偉いと威張っていなければ、落ち着かない動物なんですよね。」